

博士論文要約

吉 琛佳

<タイトル>

再想像された「近代」：日本と中国のウェーバー受容と東アジア社会科学

<要約>

本研究は、ドイツの社会学者M. ウェーバーの日本と中国における受容の歴史をケースとして比較研究を行い、東アジアの社会科学的知識の形成と存立条件や、その内部における多様性を考察する試みである。

社会科学は社会的事実をその対象とする学問分野であり、対象社会の実際の状況を理解し、諸現象の発生要因を探求し、それに基づき可能なる変革を推進することを目標とする。こうした学問的な性質を持つ社会科学はつねにそれが属する社会の特質を追求するとともに反映する。近代以来の世界諸社会における資本主義の発達、言い換えれば近代化の進展は、いうまでもなく社会科学の普遍的な成立背景である。世界諸社会の多様な近代的な社会形態が存在する故に、それぞれ発展してきた社会科学も共通な傾向を有しながら、独自の学問的伝統を形成した。

例えば、A. E. バーシェイは比較産業化研究の影響を受け、日本的な後発近代国家とその社会科学の特徴を「発展的疎外 (developmental alienation)」と特徴づけた。彼によると、後発国家としての日本（そしてドイツ、ロシア）の近代化はイギリス、フランス、アメリカなど環大西洋国家と明らかに異なっている。これらの後発国家は近代化を実現すると同時に、常に英仏などによって排除されて、後進的な存在として定義され、またはそう自己呈示していた。「進歩」と「後進」という二つのテーマは互いに矛盾しながら相互に維持され、同時にこれらの社会の近代化プロセスに存在し、また独自の特徴を持つ社会科学の伝統を形成した。しかし、バーシェイの言う「発展的疎外」社会の特徴は、必ずしも後発国家に限られたものではない。

またバーシェイの分析枠組みは、20世紀から最も広範かつ深刻な影響力を持つ観念の一つである、人種的・文化的地位における差異を対象化することが出来ない。日本が置かれてきた、西洋社会の「他者」としての地位は、本論の課題の一つである、東アジアの西洋社会理論に対する位置づけの問題にとって決定的な重要性を持つ。なぜならそ

これは古典的社会理論が論じる「伝統」と「近代」と対面するとき、それを自社会の「伝統」として受け入れるかどうかの決断とつながっているからである。ドイツ（そして正教会の伝統を通して自身を広い意味でのウェスデンに位置づけるロシア）にとって、その近代化はいかに「疎外」されたとはいえ、ある程度自分を「西洋的伝統」に位置付けることができ、完全なる「他者」にならない。しかし日本の場合になると、たとえその前近代の社会制度がいかにヨーロッパの「封建制」と類似し、それゆえ西洋近代化の物語になぞらえて自己物語を描く可能性があったとしても、自分のことを完全にギリシヤ・ローマを起点とした西洋近代の世界史認識に当てはめることはできなかった。そして中国の知識人は古典的社会学理論に遭遇する際も、中国社会が日本と似たように、あるいはそれ以上ヨーロッパ社会の「他者」の位置に置かれたことを認識し、それを出発点として自らの近代社会認識を構築し始めた。それゆえ、「発展的疎外」論の有効性を一部認めながら、社会科学の発達におけるアイデンティティをめぐる諸問題を扱う時のその無力さを認識しなければならない。

バーシェイの著作の第2章は明治以降の日本の社会科学に関する概説であり、その歴史的沿革を相次いで出現した5つのモメント（新伝統主義、多元主義、マルクス主義、近代主義、文化主義）によって説明した。その終わりで、バーシェイは日本の社会科学の現状を「日本－西洋といった枠組みは腐食したように見えるが、日本－アジアの軸上に設定される新しい社会科学のうちに現実的な可能性があるかどうか、はっきりしない。」と認めた。筆者から見ると、こうしたアジアの軸上に設定される研究が欠如した故、近現代東アジア諸社会の間に存在する多数の思想的関連は長い間、検討されていなかったままである。諸社会の20世紀の思想史を並べて観察する場合、各社会が共有し互いに理解できる基本要素の存在と、その背後にある諸社会の近現代史に通底する構造的な特徴が浮かび上がる。こうした社会思想史の共有によって、アジア近代社会に対するより包括的な感覚を導き出すことが可能になる。

ウェーバーは社会学においてもっとも影響力を持つ古典的な学者の一人であるだけでなく、「合理化」をキーワードとして近代資本主義社会に関する基礎的な認識様式の一つを提示した人物でもある。近代化の道を歩み出したどの社会にも、ウェーバーの学問を参照・対決しながら、自らの社会に「近代」の姿を描き出す責務が課せられている。また、他の論者の研究対象は主に西洋社会に集中されたが、ウェーバーはその比較宗教社会学において、東アジアを含む多数の文明地域を研究対象とした。それゆえ、ウェーバーを読む東アジアの知識人たちも、「西洋近代」だけでなくそれに必然的に内在している「オリエント像」と対面しなければならない。それゆえ、東アジアにおける近代社会思想の確立は、東アジアでのウェーバー像の繰り返された形成と変容という、一つのケーススタディからやや全般的・重層的に具現化することができる。

こうした理解に基づき、本研究はウェーバーの日本と中国における受容を手がかりとして、東アジアにおける「近代」をめぐる認識の形成と変容を中心とする社会科学史の一側面を描き出す試みである。

本研究は二部に分けて日本と中国でのウェーバー受容を考察する。第一部ではまず、日本と中国におけるウェーバー受容の3つの具体的なシーンを考察する。日本におけるウェーバー受容の歴史から選ばれたのは戦時期の2つの事例である。日本におけるウェーバー研究に関する論述において、ウェーバー受容の隆盛は、戦後の社会科学の再建や戦後民主主義思想の展開と結びつけられていることが多い。大塚久雄に代表される戦後の「近代主義者」による研究は、マルクス主義とともに戦後日本の社会科学の主役となった。しかし、大塚をはじめ、多くの戦後知識人の研究が、戦前からその基盤が築かれていたのである。そして、戦後初期のやや均質化された「近代主義」的なウェーバー理解とは異なり、戦時期のウェーバー研究は逆説的に、多くのレベルではより多元的で複雑なものであった。

例えば、第一章における大塚の戦時期のウェーバー受容の考察が示すように、戦後の大塚の後に「近代主義的」と評された研究とは異なり、戦時中の大塚の研究は、近代社会の光と影の側面を同時に深く考え、ウェーバー研究に基づき、近代に関する二重の認識枠組みを確立していたのである。また、第二章でのアジア社会論の受容に関する検討でみられるように、戦時中の社会学者のアジア社会理解もまた、後ほどの「日本オリエンタリズム」批判で指摘されたように一元的なものではなかった。島恭彦は、ウェーバーの理論に潜んだヨーロッパ的なバイアスに立ち向かい、アジア的な視点からのアジア認識を確立することに努めた。これらの事例はすべて、「近代」と「アジア」の問題をめぐる、戦時期社会科学の複雑性を示している。冒頭の2章では、これら二つの事例の検討を通して、ウェーバー研究の歴史に存在したこれらの可能性を再発見し、アジア社会における社会科学の存立条件との関係を探ろうとする。

第三章は中国に移り、1980年代以降の社会科学再建初期におけるウェーバー受容を検討する。日本の場合のテーマ別の考察とは異なり、この章での考察は、30年間の思想誌に掲載されたウェーバーに言及する文章に対する分析である。中国におけるウェーバー研究は、その開始の遅さと改革に伴う急速な経済発展とともに推進された過程であり、初期段階から多様かつ複雑な受容傾向を示した。この時期の代表的な思想誌である『読書』の記事を整理することで、ウェーバーの学説に対する理解様式を5つのタイプに類型化する。

第四章では、前の3章の内容をまとめて、近代化の転換期の中国と日本におけるウェーバー理解の知識形成の条件を究明する。第一章から第三章までのケーススタディは異なる時期の受容史を対象としたもので、また考察のしくみも対象に応じた多様性を保留したとはいえ、日本と中国のウェーバー受容における多数の類似した問題意識が発見できる。筆者は本章で、これらウェーバーに関する諸言説を検討し、それによって「近代

の二重性」と「非西洋の二重性」という2つの価値関心に関する理念型を確立することを試みたい。

まずは近代に内在する二重性である。これは、近代という時代の特徴を「主体化と客体化の同時的展開」として捉える思考形態のことを指す。すなわち近代化や資本制の確立と発達は、人間が解放と束縛、支配と服従、または自由の獲得と疎外感の深刻化など、互いに相反する存在状況を同時に生じさせ、推進するプロセスと見なすことが出来る。しかし、アジアの知識人はもう一つの二重性、すなわち「非西洋の二重性」にも直面しなければならない。彼らは西洋の世界支配に直面する際、その世界に関する認識枠組みをも受け入れざるを得なかった。東アジアにおける社会科学の成立は当然ながら、こうした観念の世界史的文脈で理解されなければならない。「後進的」と認められた土着的知識体系の正当性が著しく下落したため、非西洋社会における知識人は追求すべきものと自分にとって所与のものとの間の矛盾に陥る。

近代的二重性と非西洋的二重性は、やや異質で互いに独立した2つの影響要因であるとはいえ、知識形成において常に絡み合いながら同時に作用する認識枠組みでもある。非西洋の知識人は自社会の近代を思索する際、常にこの2つの二重性の問題の矛盾に直面しながら思考を展開し、あるいは思想のアンビバレンスをそのまま維持し再生産し続けてきた。本章の第3節は日本と中国で行われたウェーバー受容の諸様式を例として取り上げ、異なるパターンのウェーバー読解に潜んでいる、2つの二重性がもたらした認識構造を確認する。

第二部での最初の2章（第五章と第六章）は、戦後日本と「新時期」（80年代の改革開放以降）の中国の社会理論・社会思想における「ウェーバーとマルクス」を主軸とした社会理論・社会思想の言説に関する平行的な考察を展開しようとする。これにより、東アジアのこれら「第二の近代化期」における社会認識の形成を把握することを試みる。

この対照的な考察からわかるように、日本と中国におけるウェーバー＝マルクス問題の検討は、両社会の「第二の思想啓蒙」期（戦後日本と80年代以降中国）における類似した知識人の観念図式に基づいて発生したものである。こうした観念図式は単線的な進歩史観に基づいた、前の時代の封建性への批判と「近代」価値の再確立に対する希望によって特徴づけられる。しかし、これら二つの時代のウェーバー＝マルクスをめぐる議論は、さまざまな要因に影響され、最終的にはまったく異なる思想傾向をとることになった。日本では、大塚や丸山といった戦後の知識人が、社会的構成体の考察に行為者及びそのエートスの次元に関する検討を導入することによって、普遍的な近代的主体の肖像を確立し、さらにこうした主体の自由と平等が保証される組織的条件を論じた。一方で中国での研究は、蘇国勲と汪暉の研究によって典型的に示されたように、「合理化」を中心概念としたウェーバーの近代理解の普遍性に疑問を投げかけ、ローカルな文脈を重視した近代社会認識を構築する試みを展開していた。第七章では、これら2つの

啓蒙思想が発生した文脈としての社会思想的背景と知識人集団の存在様式を比較して、こうした結果をもたらした要因を検討してみる。

総合すれば、本研究によって明らかになったことは、以下のとおりである。ウェーバーの学説が受容される過程は、日本や中国の社会が「近代社会」を再検討・把握し、その上で自国社会の近代化を再想像・再創造するという、「第二の啓蒙」の過程と密接に結びついている。こうした西洋出自の理論の導入と再定位によって、東アジア社会は孤立と停滞を乗り越え、近代的な社会形態の模索を再開し、それを社会変革の方向性として確立した。しかしアジアで行われた近代社会に関する思考は一枚岩ではなく、常に近代に内在した主体化と客体化の二重のプロセスや、また西洋から由来した知識と所与としての自己アイデンティティとの葛藤に直面しなければならなかった。

こうした共通の認識枠組みに影響されながら、「第二の啓蒙」期における日本と中国の知識人のウェーバー受容はまた、「遠心的近代化」と「求心的近代化」と呼ぶにふさわしい、異なる「近代化」の認識モデルを発展したのである。すなわち、戦後日本の文脈では、多くの知識人が「内面化された西洋の視点」から自社会を考え、議論する傾向がみられる。そのため、戦後の社会科学は（内面化された）西洋の視点から日本社会を探究し、批判する言説として成立した。特に丸山真男と大塚久雄をはじめとする論者は、ウェーバーとマルクスの社会認識を組み合わせることで、近代社会の多種多様なバリエーションをめぐる比較研究のアプローチを形成した。論者たちは、伝統から近代への社会の変容を普遍的な過程としてとらえながら、その過程における諸社会の特殊性の分析を通じて、明治以降の日本型近代化の問題性（近代的主体の未確立など）を論じ、さらなる発展の方向を指摘したのである。

一方で改革開放後の中国社会では、啓蒙知識人が近代化を唱えた際、実は「外から」近代（西洋）的制度や文化を取り入れることによって、自社会が持つ伝統に対する改造・更新を提唱していたのである。「社会学の中国化」というスローガンが示すように、社会学者は中国社会の立場から、社会科学的知識をいかに自らの目的のために改造すべきかに、より焦点を合わせてきた。そうする時、彼らは「自分の文化的伝統に基づく知識」をいかに持続させるかという問題意識に重きを置いている。そのため、儒教を含む知的伝統の創造的変革を考えて、西洋の文化的ヘゲモニーに反発し、理論受容によって内面化した認識に潜んだ西洋中心主義を除去しようとする傾向がみられる。同じく社会の「近代化」を夢見た時期であるとはいえ、これら「第二の啓蒙期」における「近代」と自社会の関係性に関する認識モデルの根本的な差異がある故に、両国のそれ以降のウェーバー受容ないし社会科学の展開に絶大かつ経路依存的な分岐が出現したと考えられる。